様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１４０１０２７

研究課題名（和文）タジキスタンにおけるゾロアスター教遺構の発掘調査及び仏教との交渉についての研究

研究課題名（英文）Excavation of Zoroastrian ruins in Tajikistan and studies on connection with Buddhism

研究代表者
蓮池　利隆（HASUIKE, Toshitaka）

龍谷大学・仏教文化研究所・客員研究員

研究者番号：５０３３００２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,700,000円、（間接経費）　3,210,000円

研究成果の概要（和文）：タジキスタンの遺跡発掘により、七世紀のゾロアスター教施設を確認することができた。チョルタクと呼ばれる方形拝殿は中心に基壇がありその周囲に回廊を伴う。この施設では複数の儀式用炉址が出土した。さらに、この拝殿は付属する施設である厨房や居住空間、水浴施設などからなる宗教的複合施設（コンプレックス）を構成している。このゾロアスター教拝殿の発見により、この遺跡において１９７０年代の発掘で発見された方形構造の仏教寺院遺構が既存のゾロアスター教施設からの転用であるという仮説を裏付けることとなった。

研究成果の概要（英文）：On excavation of ruins in Tajikistan, we found Zoroastrian facilities in 7th century. A square planned temple called cortak had surrounding corridor around a central platform. We found several vestiges of ritual hearth in these facilities. Moreover, the temple and attached kitchen, living hut, bathe room consisted one religious complex. Through this discover of Zoroastrian temple, we could backing a hypothesis that a Buddhist square temple excavated from this ruins in 70's diverted from forego Zoroastrian temple.

研究分野：人文学Ａ

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：タジキスタン　仏教　ゾロアスター教　ミトラ神信仰　阿弥陀仏信仰

１．研究開始当初の背景

(1)　平成１６年、研究代表者の蓮池利隆は龍谷大学国際文化学部の佐野東生教授の紹介で、当時の在タジキスタン日本臨時大使であった三好晃一氏の支援を受けてタジキスタン科学アカデミーとの交渉を開始した。翌平成１７年には第一次の科研費の助成を受けて「中央アジア（タジキスタン）における異思想の交渉に関する調査・研究」の題目で研究を開始した。そして、平成１８年に現在の調査地であるカラ・イ・カフィルニガン遺跡の発掘についての許可・契約書を取り交わし、地中電磁波レーダーによる発掘予備調査を実施、平成１９年から本格的に発掘調査を実施した。

(2)　平成２１年には第二次の科研費によって当該研究である「タジキスタンにおけるゾロアスター教遺構の発掘調査及び仏教との交渉についての研究」を開始した。先の調査で発掘を始めた２ヶ所の遺構についてエリアを拡大しながら、遺物の検出及び平面図を作成するためにトータルステーションを購入した。1970年代の調査では遺跡の地形図が作成されていなかったため、遺構間の関連性など総合的な検討が十分にできていなかった。この課題を検討するためにも遺跡全体の地形図は不可欠なものとなっていた。

２．研究の目的

中央アジアにおける考古学調査はこの地域において展開した多様な文化の交渉を確認するうえで重要な意義を持っている。古代においてアケメネス朝ペルシアの勢力下にあった時代からイラン文化の影響は大きなものであった。この影響は後代においても維持され、７世紀頃の玄奘『大唐西域記』には西域におけるイラン文化の広がりが記録されている。因みに、玄奘も訪れているアフガニスタンのバルフはゾロアスター教の開祖、ザラスシュトラが埋葬された所縁の地とされている。このことは、イスラーム化した現在でも中央アジア一帯に習俗化したゾロアスター教が残存していることの一要因であり、佐野教授の研究領域である。また、アレキサンドロスの東征によるヘレニズムの影響も、先述のタフティサンギーン遺跡などの出土文物に明瞭に残されている。中央アジアのバクトリア時代におけるヘレニズムは、インド北西部ガンダーラに展開したヘレニズムと同じ背景において成立したものである。ガンダーラは現在のパキスタンに当たるが、イスラーム原理主義が勢力を拡大する中、発掘調査をおこなうには危険な情勢にある。それが不可能な現時点においては、中央アジアの遺跡発掘はガンダーラで展開したであろう文化的交渉を研究するための重要な資料をもたらしてくれる。さらに、本研究の具体的目標である浄土教、阿弥陀仏信仰の展開について考える時、トカラ族の果たした役割は見逃すことはできない。トカラとは民族や言語の名称として使用される言葉で、紀元２～３世紀に北西インドを統治したクシャーン朝は中央アジアのトカラ五翕侯の一つを祖としている。クシャーン朝において展開した大乗仏教の思想的背景の一つにイラン文化があったことは注目すべきことである。特に、阿弥陀仏信仰の起源については、伊藤義教『ゾロアスター研究』にも指摘されるようにゾロアスター教の影響を無視することはできない。このトカラ族が東方へ移住したことは、『大唐西域記』にトカラ国とのその周辺のトカラの故国、さらにはタクラマカン砂漠の西域南道地域にはトカラの故地があったことが記述されている。研究代表者蓮池は平成４年から平成９年まで、西域南道のニヤ遺跡における仏教遺跡調査に参加したが、その調査の中でイラン文化の影響を検証する必要性を痛感した。特に日本に伝来した常行三昧堂の元となる方形仏堂が西域南道に散在し、さらにその源流が中央アジアにあることを確認することができた。カラ・イ・カフィルニガンの遺跡には後に掲載する遺跡地形図にも示されるように、方形仏堂と方形拝火教拝殿とが併存しており、両者間の交渉・融合が起こったものと想定されるのである。

３．研究の方法

日本とタジキスタンの共同発掘調査であり、測量に使用するトータルステーションは日本から搬入し、調査が終了すれば再び日本に持ち帰る。また、海外の発掘調査であるため、出土した文物はすべてタジキスタン博物館に収蔵される。したがって、写真資料や測量の観測データという形での成果を持ち帰ることになる。岡田教授の協力を得て、理工学部のデジタル処理の技術を活用し、アーカイブの構築をめざす。

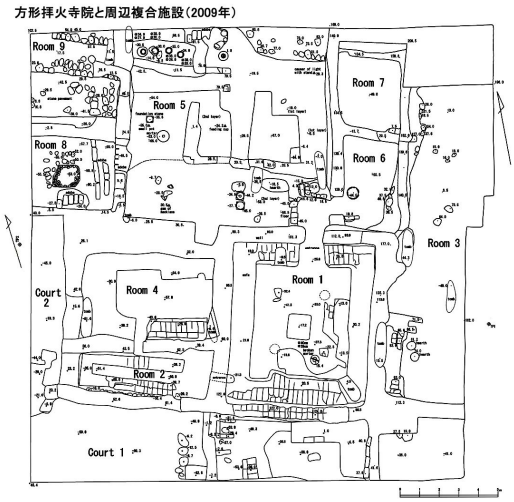
４．研究成果

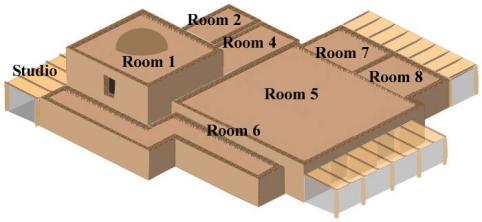
(1)　カラ・イ・カフィルニガン遺跡については１９７０年代の発掘調査で仏教寺院址が発見されており、７世紀前後に中央アジアの仏教がどのような文化的背景の中で展開してきたかを明らかにすることができるものと期待されていた。そして、これまでの発掘によって仏教とゾロアスター教の習合を明らかにすることができた。平成１９年以降、３ヶ所の遺構を発掘する中で、ゾロアスター教施設の存在、及びそこで信仰されていた神像を検出することができた。中心に基壇がありその周囲に回廊を伴ったゾロアスター教方形拝殿（チャルタク）からは複数の炉址を検出し、それに付属する施設である厨房や居住空間、水浴施設などからなる複合施設（コンプレックス）を構成していることが明らかとなった。この拝殿の発見により、１９７０年代発見の

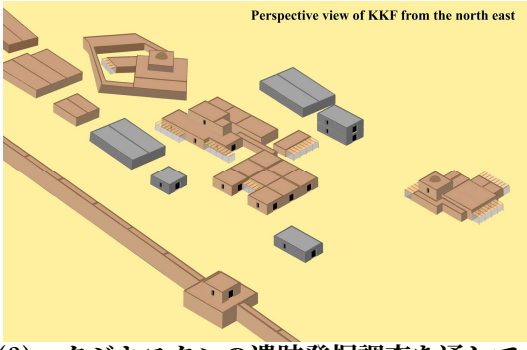
仏教寺院遺構が同じく回廊を伴う方形の構造であり、ゾロアスター教施設から転用されたのではという従来から提起されていた仮説を裏付けることとなった。今回の助成で作成した地形図を以下に示す。南北２５０メートル、東西１５０メートル、約３．７ヘクタールの都城遺跡であり、実線で描いた輪郭は日干しレンガの壁遺構である。薄墨で示した部分は当該調査で発掘したエリアである。それ以外の実線部分は１９７０年代に旧ソ連主導によって発掘された遺構である。方形の仏堂遺構と今回発掘の方形拝火神殿は約１００メートルの距離で並存していたことがわかる。

カラ・イ・カフィルニガン遺跡

方形拝火教神殿ＫＫＦ－１０の平面図と俯瞰図及び遺跡北西部の俯瞰図を以下に挙げる。







(2)　タジキスタンの遺跡発掘調査を通して、イスラーム化以前の中央アジアに習俗化したゾロアスター教が強い影響力を保っていたことを確認することができた。トカラ時代の出土品にはアフラマズダを助ける有力な神であったミトラ（イランの名称ではミフル、ミスラ）が数点含まれており、その信仰の広がりを示している。例えば平成１９年には膝下に拝火壇を置くミトラ像が出土している。また、平成２３年には宝冠あるいは髷を頂く菩薩像とも見ることができるテラコッタ像が出土している。

型からの復元像

平成１９年度から平成２４年度までに十数体の小型塑像と２点の塑像型を検出することができた。これらの資料を検討した結果、先に述べたミフル神（インドではミトラとして知られる神格）の他に、ヴァルナ神に相当する神格を確認することができた。２点の塑像型はそれぞれ両神格を表すものと考えられる。ミフル神は、片手を拝火壇に差し伸べる姿であり、クシャーン朝コインの歴代王の刻印に類似するポーズをとる。ヴァルナ神は片手に半月を掲げたポーズである。インド神話においてはミトラとヴァルナは双子のアスラ族で

あり、それぞれ日天と夜天を司るとされている。インド・イラン語族に属するイランにおいてもこの双子の神は主要な神格として展開したと考えられており、仏教とゾロアスター教の交渉を考えるうえでも重要な発見であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①佐野東生、Mysticism in Islam and Japanese Religions、Report of Ryukoku GP, Graduate Program for Asia and African Studies, Ryukoku Univ.、査読無 2013

②蓮池利隆、大谷探検隊のめざしたもの、中央仏教学院紀要、査読無、22/23 合併号 2012、66-82

③佐野東生、シーア派イスラームとの対話－神秘主義をめぐる日本との共通性を探って、国際文化研究、第 16 号、龍谷大学国際文化学部、査読有、2013

④岡田至弘、山本龍吾、芝　公仁、経年変化を考慮した重色モデルによる金銅仏表現、日本情報考古学会、第 29 回大会、セッション 4、査読無、2012、1-6

⑤岡田至弘、Digital Conservation for the Kangnido, an Old Wolrd Map、The Congress of the Asia Association of World Historians, 査読無、2012、8-10

⑥岡田至弘、山本龍吾、芝　公仁、経年変化を考慮した混色モデルによる金銅仏表現、情報処理学会、人文科学とコンピュータシンポジウム、査読無、2011、237-242

⑦岡田至弘、Digital Conservation for Cultural Assets of Wall Paintings and Maps、The 5th International Symposium on Advanced Science and Technology in Experimental Mechanics、査読無、2010、8-15

⑧佐野東生、イラン立憲革命再考－第二次立憲制期（1909－11）におけるタキーザーデの活動をめぐって、イラン研究、第 5 号、大阪大学、査読有、2009、217-233

⑨岡田至弘、Realistic Representation by Digital Archives of the Nishi Hongwanji Temple、第 22 回 CIPA 国際シンポ、Digital Documentation, Interpretation & Presentation of Cultural Heritage、査読有、2009、128-133

〔図書〕（計６件）

①蓮池利隆、大学生協京都事業所、アルダー・ウイラーズ・ナーメ　－敬虔なるウイラーズの冥界旅行－、2012、223

②佐野東生、ミネルヴァ書房、西アジア・中央アジアと日本の交流－飛鳥時代から現代まで、2011、213-243

③蓮池利隆、佼成出版社、遺跡に見る仏教信仰の諸相、共著、新アジア仏教史５巻、2010、264-287

④蓮池利隆、大学生協京都事業所、古代ソグドの宗教、2010、1-147

⑤佐野東生、ミネルヴァ書房、近代イラン知識人の系譜－タキーザーデ・その生涯とナショナリズム、2010、377

⑥蓮池利隆、大学生協京都事業所、ミトラ仏と覩貨邏の仏教、2009、134

〔その他〕
ホームページ等
http://www.afc.ryukoku.ac.jp/tj/
http://homepage3.nifty.com/T_Hasuike/

６．研究組織
(1)研究代表者
蓮池　利隆　（HASUIKE, Toshitaka）
龍谷大学・仏教文化研究所・客員研究員
研究者番号：５０３３００２２

(2)研究分担者
岡田　至弘　（OKADA, Yoshihiro）
龍谷大学・理工学部・教授
研究者番号：３０１２７０６３

佐野　東生　（SANO, Tosei）
龍谷大学・国際文化学部・教授
研究者番号：６０３５１３３４